

著作・雑誌掲載記事等の報告

村田 宏

1. 『モダニズムの越境』（人文書院，2002年3月）

本書は、平成10年度から12年度まで行われた文部科学省科学研究費補助金（基盤研究〔A-1〕）による共同研究「総合研究：20世紀アヴァンギャルド諸潮流と表象文化の現在——モダンから越境へ」（課題番号10301024）の成果を三分冊（I越境の想像力，II権力と記憶，III表象からの越境）にまとめて刊行したものである。筆者は、第二分冊「II権力と記憶」において、「フェルナン・レジェと『赤い30年代』」と題する論考を寄せ、ファシズムと共産主義が鋭く対立した、いわゆる「赤い30年代」の人民戦線成立期のフランスの美術と政治のかかわりを、画家フェルナン・レジェを事例として考察した。具体的には、1937年のパリ万国博覧会に際して制作された《力の伝達》と題する作品が、ソヴィエト社会がロシアの民衆の理想に従って建設されつつある社会と信じた作者レジェの、新生ロシアに対する憧憬と共鳴を結晶化させた作品であったことを論じた。

2. 「James Hyman, The Battle for Realism: Figurative Art in British During the Cold War 1945-1960」, 『學鏡』（丸善，2002年5月第99巻第5号），50-51頁。

これは、ジェイムズ・ハイマン著『リアリズムのための戦い——冷戦時代のイギリスの具象絵画』（イェール大学出版局，2001年刊）についての書評である。

1946年3月5日、イギリスのチャーチル前首相がアメリカのフルトン（ミズーリ州）である演説を行った。「今日バルト海のシュテッティンからアドリア海のトリエステに至るまで、大陸を横断して鉄のカーテンがおろされている」と、いわゆる「冷戦」の存在を告げる名高い声明である。ワシントンとモスクワという新たな政治的二極構造が、世界を二分する「冷戦」の時代においては、抽象美術に代表されるモダン・アートが「自由の象徴」と目されていた。そうした時代にあって「反動的」でさえあるリアリズムがイギリスで豊饒な開花を遂げたこと、その実相に改めて深索の照明を投じ、戦後イギリス美術の復権と再評価を試みたのがハイマンの著作であることを書評では力説した。

3. 「鋼鉄のミューズ、エッフェル塔」『國文学』（2002年9月第47巻11号），110-113頁。

画家ロベール・ドローネー（1885-1941）は、その絵画的出発のほとんど最初からエッフェル塔という鋼鉄のミューズに魅了されていたが、その最初のエッフェル塔作品というべき《塔，第一習作》（1909）のなかには、いわば妄執とでも呼ぶべき、生々しい作者の肉声が

響いていた。1909年、ロシア出身の女流画家ソニア＝テルクとの婚約を記念して制作されたとされるこの作品には、性的なニュアンスを帯びたエッフェル塔が明瞭であるということである。

ルイス・ブニュエル晩年の問題作『自由の幻想』（1974）を引き合いに出すまでもなく、エッフェル塔に性的含意のあることは自明であろう。いわば「禁忌の転倒」というライトモチーフに貫かれたブニュエルの『自由の幻想』の冒頭部分には、よく知られるように、なんの変哲もないパリの観光写真に性的興奮を覚える一組の夫婦が登場する。場面には、禁忌と侵犯の快楽が表裏一体であることがあきらかに示唆されているのだが、不思議なことに、夫の手によって写真が破り捨てられるサクレ＝クール寺院をはじめ、オルセー駅や凱旋門といったパリのモニュメントが「禁忌の転倒」を担うのに反して、パリを代表する建造物たるエッフェル塔はスクリーンに不在なのである。その理由はさまざまに推測できようが、この真相おそらく、あくまでも「無害このうえないパリのモニュメント」の「禁忌の逆転」を遂行してみせようとするブニュエルにとって、男性の身体の一部との明白なアナロジーを形成するエッフェル塔は、まずもって回避すべき建物であったということになるだろう。

こうしてエッフェル塔に明白に見てとれる性的含意をその私的な事実と重ね合わせることによって絵画化した作品、それがドロローネーの《塔、第一習作》ということになるのだが、つまるところ、忘れてならないのは、一見したところ、近代的なテクノロジー礼讃に終始するかに見えるドロローネーの「エッフェル塔」絵画には、人間の生に根ざした内的世界が広がっているということである。